

## 象と赤いうがり、どっちが大切やねん！

作者：網渡男（つなわたりだん）

東アフリカ、タンザニア国には、世界的に野生動物で有名な自然公園が多くあり、ンゴロンゴロ保全地域やセレンゲティ国立公園は世界遺産に指定されている。日本や欧米諸国から多くの観光客が訪れる。観光収入は同国にとっては重要な産業で、GDP の 17% を占める（在タンザニア日本大使館HP）。しかし、外国人を魅了するセレンゲティ国立公園、「野生動物の王国」は、かつて村が存在して人々が暮らしていた「人間の土地」だったこと知る観光客は少ない。このセレンゲティ国立公園の外れに人口 2000 人ほどのロバンダ村がある。この村はかつて現在のセレンゲティ国立公園内にあり、国立公園に指定されると強制的に移住を強いられた過去がある。

網渡（つなわたり）が、このロバンダ村に行ったのは 35 才の雨期の終わった初夏であった。ここの「うがり」はソルガムの粉でつくった「赤いうがり」である（通常はトウモロコシ粉で作った白いうがり）。村ではソルガム畑が周辺に多くある。このソルガム畑が一夜にして全滅することが起こっている。これは穀物の味を覚えた野生のゾウが畑のソルガムを一夜にして食い尽くしてしまうからだ。すでに夜警をしていた男性がゾウに殺される事件まで起きている。

問題は、「ゾウ VS 村人」の単純構造ではない。観光用に保護され人間を恐れなくなったゾウを作り出す植民地主義的な「西洋の自然保護思想（我々も含むだろう）VS 住民」と「同国の経済事情」が絡んだ多角構造になっている。かつて存在したゾウと村人の共存関係を壊したのは何か（誰か）である。また、村人はかつてヌーが大移動をする時期はヌーを狩っていた。しかし、今では野生動物を狩猟することは禁止されている。国立公園は同国に大きな収益をもたらすが、富裕国から来た観光客（我々）を楽しませる為にゾウは保護され、一夜にして 1 年に 1 回の収穫を奪われたロバンダ村の人々は、ヌーを奪われ、ソルガムを奪われても誰にも保証してもらえず、命を落とし、事実を訴える機会さえも与えられずにいる。

象は辛いのが嫌いだと聞いて、ロープにチリをたっぷり塗って、ソルガム畑の周りに張っても何の効果もなく、ひょいと跨いであつという間にソルガムを食べてしまうのだ。欧米人がよく 1 頭 100 万円ぐらいで象の狩猟権を買って象を撃っているが、収益は国や旅行会社へ行く。その収入を村へ還元できないのだろうか？網渡、大きな疑問を抱く、暑い夏の午後であった。



ウガリ



象の被害



網渡、四十〇才、春、ロバンダ村の村長さん達が日本にやってきた。なんと網渡の家に泊まってくれるのである。村長さん達は、いろいろな所に寄付を求めてスポンサーをつかまえて、自力で日本にやって来た。一行は 5 人である。彼らは、東京のビルや電車や電気製品に感激していたが、レインボーブリッジを車で抜けた時に、「すごい、人間がこんな構造物をつくることができるんだ」と言って泣き出した。網渡は逆に涙が出そうになったのだった。なにか大切な物がそこにある様な気がしたからだ。しかし、世界の進歩はすごいものだ。いまではセレンゲッティのはずれのロバンダ村から携帯で「ハバリ、ジャンボ」だし、村長さん達は娘のお土産に PC を買っていったし、でも、今でも象にソルガム畑を荒らされて困っているし、みんな日本人より幸福そうだし、健康そうだし、網渡の疑問は続く、爽やかな春一番の吹く朝であった。 おわり。